

リレー随筆

「死」への責任

済生会川内病院 小園 智樹

はじめまして。研修医2年目の小園智樹といいます。鹿児島大学病院を基幹病院として、現在は済生会川内病院で研修させていただいております。

このリレー随筆を書かないかという話を医学部時代の友人からいただき、私なんかに任せてもらえるなんてありがたい話なのだからやってみようと思って返事をしましたが、私にはこれといった趣味もなく、誇れるような取り柄もありません。さて何を書こうとしばらく迷っていました。そもそもこの文章を読んでくださるのは、ほとんどが私よりも上の先生方。私なんかが偉そうに現在の医療や社会について考えていること、自分の関心のあることなどを話すのも失礼のような気がしていました。

ですがちょうど、この話をいただいたのは3月上旬のことです、私にとって医師人生1年目が終了しようとしているところでした。これまでに前例のないコロナ禍という特殊な状況下で医師になり、上級医の先生方や同期と思うような交流ができない状況で、今回せっかく自由に文章を書く機会を頂いたので、新人は新人らしく、この一年間の中で経験した心に残っていることを随筆なのだから自由な形式で書かせていただこうと思い、書き始めた次第です。

ずっと忘れられない患者。私にとっては辛く、これまであまり人には話すことのできなかつた、私が医師として初めて体験した「死」についての文章です。

医師になって3カ月目に突入する6月のこと。薬のオーダーの仕方や患者さんへの病状・治

療方針の説明など、医師としての仕事をようやく理解し始め、様々な手技を経験するのが楽しい、もっといろいろな手技を経験したいと思い始めた頃でした。6月は救急科で研修していたので、夜の当直を指導医の先生と2人で入らせていただく機会がありました。「今夜は、採血やルート確保・血ガス測定など何か手技が必要な患者が運ばれてくれば全部自分がやらせてもらえる」、そう思っていた矢先の出来事。深夜3時にCPA(心肺停止)で運ばれてきた高齢の女性。救急隊から胸骨圧迫とマスク換気を引き継ぎ、指導医の先生が家族に話を聞いている間、私と看護師さんでひたすら蘇生を行います。シミュレーターではなく、私にとっては初めての生身の身体への心肺蘇生。「この手を止めれば患者の心臓が止まる。」「絶対に止めるな。絶対に止まるな。」「戻ってこい、戻ってこい！」と何度も何度も心の中で思いながらも、すぐそこまで迫りくる死の恐怖に自分の膝はガクガクと震えが止まりません。あれほど「いろいろな手技をしたい」と思っていたことが恥ずかしくなるくらいの恐怖心。それでも看護師さんと交代しながら胸骨圧迫とマスク換気を何とか続けました。最終的には指導医の先生が家族にDNAR(Do Not Attempt Resuscitation)の意向を確認し、そこで蘇生は終了。そのままお見取りすることになりました。対光反射消失・呼吸音なし・心音なしを確認します。私が医師として初めて経験した患者の「死」。人は死ぬと心臓が止まるのだという当たり前すぎる現実。自分の無力さを痛感させられ、ただただ茫然と立ち尽くし、遺族の泣き崩れる様子を目の当たりにする。「お前は何のた

めに医者になった？」そんな考えが自分の頭の中で浮かんでは消えてを繰り返しました。

その後は当直室に戻っても全然眠りにつくことはできず、蘇生中の一連の流れを思い出し、復習と自問自答を頭の中で繰り返します。その中で思い出した蘇生中の出来事。

胸骨圧迫と交代で私がマスク換気を行う担当になり、左手でマスクを患者の顔に押し当て、右手でバッグを押す。患者の胸は上がり、酸素が送られているのは確認できた。しかし同時に左手付近から酸素の漏れる音が微かに聞こえた気がする。普段なら聞き逃してしまいそうなくらい小さな音。しかし、確かに聞こえたその「ヌーッ」という音。「左手のマスクの押し当てが甘かった。次はうまく換気しなければ」と思い、左手をしっかりと固定し直してから再び右手でバッグを押そうとした瞬間、「家族からDNARの意向確認。蘇生中止。」と指導医の声。胸骨圧迫もマスク換気も強制終了。ただただ茫然と立ち尽くすことしかできない私。「次はうまくやろう」の「次」は絶対に来るとは限らない。医者にとっては「次」の手技・「次」の患者がいるけれど、患者本人にとっては「次」はない。その手技の一つ一つに全身全霊をかけて臨まなければ医師である資格がない。心の中で自分に怒りつぶやく。「お前はもう医者なんだ、プロ意識を持て。」

そんなことを悶々と考えながら、気づけばもう朝8時。日勤帯の先生に引き継いで自宅への帰路につく。歩いて家まで帰ったはずだが、どこをどう歩いたのか、途中の記憶は全くない。誰もいない一人暮らしの家に到着しソファに座り、用意しておいた朝食のパンをひとかじり。その瞬間、頭の中でぐちゃぐちゃだった感情がまとまるところなく、あふれ出て止まらない。「あの女性はこれでよかったのだろうか」「私の胸骨圧迫であの人は、家族はよかったですだろうか」「私がもっと上手に

マスク換気ができれば最後の一息はもっと楽にできたのではないか」「私がもっと・・・」「私が・・・」。様々な考えが浮かび上がっては消えていく。ただ一つだけゆるぎない確かなこと、「あの人はもう二度と、こんなふうにパンを食べることはできない」ということ。涙が止まらなかった。嗚咽するほどまでに泣いた。こんなに泣くのはいつ以来か思い出せないほど一人で延々と泣いていた。悲しさ、無力さ、悔しさ、自分が未熟なことへの怒り。それらが一気にあふれ出て止まらなかった。

そんなに悲しくて悔しくて無力でも、「お腹すいた」と私のお腹は鳴る。そしてパンをまたひとかじり。これが「生」ということかと実感させられる。そしてまた「死」を振り返って泣いてしまう。「死」と「生」を頭の中で繰り返し、どれくらい経っただろうか。それまでの疲れがどっと押し寄せてきて急激に眠くなり、ベッドに横になる。静かな部屋で横になって感じるのは自分の心臓が拍動する感覚。右手首外側には確かに脈を触れる。私はまだ生きている。生きている私が亡くなつたあの人のためにこれからできること。それはきっと「忘れないこと」。あの怖さを、あの無力を、あの悔しさを、このどうしようもない感情を忘れずに自分の心に強く刻み込み、これから先の長い医師人生を歩んでいくことが生きている私の責任なのだと思います、そのまま眠りについたのを今でも覚えている。

さて、そんな出来事から時間は流れあつという間に現在3月。研修医1年目、医師人生1年目が終わろうとしております。あの時の気持ちちは今も忘れておらず、時々思い出し、勝手に落ち込むこともたまにあります。私はあの人に顔向けるような研修・生活をしてこられたでしょうか。あれから手術や小児の診察、出産の立ち合いなど様々なことを経験させてもらいました。それでも「絶対的に自信がある」と言える手技はまだまだ1つもありません。ただそれと同時に、この1年間

[隨筆・その他]

で私には様々な「つながり」もできました。研修を行った各診療科での上級医の先生方とのつながり、いつも助けてくれる看護師さんを始めとする医療従事者とのつながり、きつい時に支え合うことのできる同期とのつながり。一人ではまだまだ何もできない未熟者な私ですが、この素晴らしい方々との「つながり」があって何とか医師として今も歩ませてもらっています。私に「死」と「生」を経験

させてくださったあの患者さんに背を向けることがないように、彼女の思いも背負って今日も私は目の前の患者さんに向き合います。

「今回担当させていただきます小園です。『全力で』治療に当たさせていただきますのでよろしくお願いします。」

次号は、県立大島病院 竹内一輝先生のご執筆です。
(編集委員会)